

“ゴールデンウイーク”この言葉、GWですませていたが、単語にしてみるとおもむきが違うね、なんてつまらないことをほざいている。今年は、GWが10日間ぐらいあった、という方々もおられ、長期の休暇らしい。ジジイになった今は、「さあ GWだ」なんて喜びや感動は無く、「家でじっとしてよう」という雰囲気だ。

若い頃は、毎年信州の山に行っていた。この時期の山はまだ雪山で、ピッケルやアイゼンをザックに詰め、80リッターのでかい荷を背負い、えっちらおっちら歩いた。今年も行ってみたいと思う北沢峠、当時はバスが無かった、というより道が無かった。戸台に車を止め、一日かかって北沢峠まで歩いた。バス道はぐんぐん斜面を登って、斜面を横切り、緑の中、爽快な1時間だが、開通は6月ころまで待たなくてはならない。なぜ今年も行きたいかというと、でかい荷をもってバスに乗り、降りたら、たった10分程度でテント場に到着。パワーのない今は、たった10分がありがたい、というより、荷を担いで、2時間3時間の登りはもう無理なんだ。若い頃に歩いた道は川沿いの道、幅広い渓谷道を一日かけて歩き、最後にエッチらの登りで、北沢峠に着く。この道は、雪の季節も、夏も、何度も歩いた。荷が肩にくいこんで、重いぞ、しんどいぞ、と叫びながら歩いた。それでも、40歳から始めた登山では、30キロ足らずしか担げなかったが、大学山岳部に所属していた友人らは、40、50キロなんてものすごい数字をのたまう。「そらあ 身体 こわす わな」

リモート：remote：「距離が隔たった」「時間が隔たった」「態度がよそよそしい」ということらしいが、検索するとデジタルの話がたくさん出てくる。コロナ禍が2年以上続き、人との接触感染を避けるために、リモートワークというものが進んでいった。はじめは、「対面でないと」「人がそばにいないと」と従来の社会環境が無いとだめだという状態から、パソコンさえあれば、どこに住もうがコミュニケーションから会社経営の仕事、商品製作のための前段階中段階なんてこともこなせるのかな。いずれにしても社会がおおいに変わってきている。

「おい zoomで 飲み会を しようや・・・」仲間内の人たちの間でこれが広がっているが、残念ながら好きではない。「そらあ おもしろいぜ 人生 目からうろこだ・・・」こんなふうには面白がっている方もおられるが、オレはひとつも面白くない。人と話をする、相手を肌で感じて、その身体から、その肌から、相手の方の言わんとする所を覗き見たい、これだね。パソコンに写った顔やら手やらで、お前さんは感じられない。

安威川の河原、ベンチのあるところでストレッチをしていたら、猛スピードの鳥が行ったり来たりとせわしない。ピューンとやって来たかと思うと急旋回、低速でふらふら、またまた急発進の急旋回、白っぽい鳥だ。おお、なんという鳥だ、きれいだ、スマートだ、ツバメより早くて大きい、今まで見たことがない鳥だ。水の上、止まったと思うと水にポチャリ、すいと飛び立ち、すいと急発進の急旋回、忙しいやつだ。

サントリー愛鳥活動という図鑑、中くらい・河川・春・白・・・「コアジサシ：チドリ目カモメ科」とでた。そうだ、こやつだ、翼開帳50センチ、急降下して小魚を捉える。絶滅危惧種と出ている。

そういえば昨日のことを思い出した。昨日は木曜日で、午前高槻で、午後はアトリエで教室があり、晩飯を食って暗い中、同じ河川敷に行った。土手の外側に野球場があり、たまたまナイターのライトがストレッチをするあたりを照らしてくれていた。「えいやあ うええ どやや・・・」なんて掛け声をかけて体をくねらせていると、横を痩せ細ったキツネがとぼとぼ近づいてきて、そのまま行き過ぎて行った。しっぽは毛が無くゴボウ状態。耳は大きい、キツネに間違いないが、病気かもしれないねというような痩せ方をしている。餌をやる人がいるのか近寄ってきたが、こいつはなにも持っていないと判断して、さっさと通り抜けていった。

足を大股に広げて、身体を前に折り曲げ足の間から草の生えた景色を見る、身近に草があり、土があり、また草が生え、その向こうに川が流れる。その景色が好きなんだ、股座の向こうに広がる地面すれすれの景色、緑がきれい、え、花がついてるじゃないか、風ぬ揺られ短い穂が揺れる。季節はやっと5月になったばかり、これからどンドン草の背が伸び、色も黒い緑に変わっていく。今がいい、まだ緑が若々しい、背丈も小さい、白に黄色、紫にピンク、けっこう色とりどりに満開だ。

昨日の続きをもっとぼやきたくなった。古事記は面白いが少しおいて、自然の話、風の話、草の話をしてみたくなった。日がどんどんめぐっていき、河原の景色が変わっていく、それらを横目で見ながら地面を見て走っていたが、生き物たち、植物たちの声も聞きたくなった。今日は、河原にICレコーダーとカメラを持参して走っている。今日は特別なものにはお目にかかれなかったが、草が、ちっさい花が、泥のたまったところが、カラスが、カモに、ウに、サギに、50センチぐらいの鯉が増水から戻れず干からび喰われている。

コロナめぼちぼち収束かな、と思い始めている。まだ、街の中、店の中、電車やバスの中、ほとんどの方々がマスク姿だけれど、人が出始め動き出してきている。「ウイズコロナ：コロナと共に生きていこう」ということなのか、感染者数が増えても減っても、もう怖くないということなのかかもしれないね。

二年前の正月ころに、ウイルス性の感染症が中国で流行りだしたというニュースは聞いていたが、まさかそのコロナ禍が二年半も続くとは、「人と会わない 出歩かない 家でじっとしていろ」なんてことになるとは思ってもしなかった。

二年前、2月が過ぎ、あれよあれよという間に世間が騒ぎ出した。「コロナめは すごい感染症だ 老人が罹れば すぐに死ぬぞ」とニュースが始め、「ヨーロッパでは 死者が多すぎ 路上にまで並べている」「医療の現場が大混乱」「え あの人が死んだ・・・」なんて聞こえてきた。3月末の展覧会を予定していたが、画廊から、「中止でいいよ お金はもらえないよ」というありがたい話、それでも一週間前までねばって、結局案内状に中止の紙を貼って皆さんに郵送した。

一か月ぐらいで収まるだろう、二か月ぐらいで・・・、三か月ぐらいで、というころには、マスコミも、5年ぐらい続くのでは・・・、と言い出した。

3月の展覧会は3回中止になった、公民館教室も2年間の休講だった、人と会う機会も減り、電車にも乗らなくなり、大阪に行くこともほとんどなくなった。それでも山だけはよく行った、「人と会わない山は 許されるだろう」なんて勝手な理屈で登った。展覧会はないけれど、絵もよく描いた。定年の無い絵描き人生は最高だ、なんてほざきながらも描いた。

一週間ぐらい前に大天が降った、大雨とはいえ災害が起こる程ではなく、安威川に来てみると、河川敷の上ヒザぐらいの水が静かに流れていた。災害級の雨が降ると、泥の混じった水がゴミと共に勢いよく流れ、コンクリートやら鉄の杭にゴミが絡まり、水が引くと、杭が曲がったり倒れたりしている。今回はいささか水位が上がった程度で、それでも膝ぐらいの水は入れないので、土手の上を走った。

三日ほどして河川敷が乾いているのを見て下を走った。泥が固まりひび割れ異様な網目模様のところ、きれいに水で洗われ掃除をしたようなところ、川の曲がり具合やら水の勢いやら、微妙な配分ができあがっている。自然はすごいね、これは人の予想を超えている。

先日、高校時代の同窓会があった。40名が集まった、例年なら60、70名ぐらい、多い年には100名近い人が集まる。今年は4年ぶりの開催となったが、人によっては、「まだまだ コロナが こわい」「基礎疾患があるので 欠席」という連絡もたくさんあった。会場のホテルも、マスク・アクリル版・勝手に歩き回らないで・集まらないように・濃厚接触の無いように、注意喚起が多く隣の人との会話も聞こえない、通じない、欲求不満の残る会場設定でした。

もうコロナめも、終わるのかなと思っている。コロナに罹っても風邪ひきのようなもの、というようになっていくのかな。ぼちぼち元に戻って一般生活が復活していくのかな。

コロナが終わったとはいえ、美術の世界がどうもパツとしない。オレも世棄て人ようになってきた、描いても倉庫に積んでおくだけ、絵を扱ってくれる人もいなくなった、絵を愛でってくれる人もいなくなった、これは淋しい。日本はどうなっていくんでしょうね、美術の世界はどうなっていくんでしょうね。オレは描いていく情熱をまだまだ燃やしている、これだけはありがたい、よそ見をせずに歩くだけだね。

三浦祐之

◎前回は、古事記は天皇家賛歌の神話ではない、天皇家賛歌にしたのは、明治・大正・昭和の50、60年の間、日本政府が、富国強兵、西欧諸国に負けまいとのことで、古事記が、天皇家が、国民の精神的支柱になっていったということだった。

◎天孫降臨は、アマテラスの孫が高千穂の峰に天下る、天から降りてくるところから始まる。アマテラスの孫であるニニギは、仁紫（つくし）の日向（ひかむ）の高千穂の久士布流多気（くじふるたけ）に天より降り立つ。宮崎県の中に、「ここが天孫降臨の場所だ」というところが二つある。山に登るオレとしては、南の霧島連山の高千穂峰 1573M を希望する、という軽～い話だ。三浦先生も、どうせなら、高く険しいところが場所としてふさわしいのではとおっしゃる。江戸時代、勢力のあった薩摩藩も、「鹿児島・宮崎の 県境にある高千穂峰 ここだ」と、身びいきで主張していたらしい。

◎ニニギは、笠沙の岬で、美しい乙女にで会い、一目ぼれ。父親のオオヤマツミのところに使いを出し、娘との結婚を申し出た。父親のオオヤマツミは娘二人と結婚するように申しで、たくさんの贈り物と共に二人を送り届けた。ニニギは、姉のイワナガヒメを見て、その醜さゆえに送り返し、コノハナサクヤビメだけを留め置いた。父のオオヤマツミは悲しみ、言った。二人を使わしたのには理由があります。姉のイワナガヒメは、石のように硬く、長寿を意味します。妹のコノハナサクヤビメは、花のように栄えますが、花のように短い寿命になるでしょう。このため代々の天皇には寿命があるのです。

◎一晚を共にしたコノハナサクヤビメが、ニニギに、「私は妊娠したようです 天つ神の御子です」これを聞いたニニギが、「たった一晚で？ 国つ神（地元）の子じゃないのかな・・・」なんて、失礼なことを言う。コノハナサクヤビメが、「あなたの子なら産まれる ほかの子なら産まれない」火を放った御殿の中で、ホデリ、ホスセリ、ホヨリの三人が生まれた。

◎わたしの孕んだ子が、もし国つ神の子であるならば、事もなく生むということなどできない。もし天つ神の御子であるならば、なにもおこりはしない、というと、すぐさま、戸のない大きな殿を作り、その殿の中に入り、土でもって塗り塞ぎ、いよいよ生まれるという時、火をその殿につけて子を産んだ。そしてその火がさかんに燃える時に産んだ子の名は、ホデリ（火照命）ホスセリ（火須勢理命）ホヨリ（火遠理命）

◎長男ホデリと三男ホヨリがそれぞれ、海幸彦、山幸彦、とよく知っている名前だ。こんなところで登場するのかと知った。三男のホヨリが後々天皇家になっていくようだ。

◎釣り針をめぐる兄弟対立、オホナムヂ（後のオオクニヌシ）と八十神の兄弟対立、共によく知られた神話。

◎長男：ホデリ：海幸彦：釣り道具を使って海の幸を獲る。三男：ホヨリ：山幸彦：弓矢を使って獣を狩る。弟が兄に、「お互いの 釣り針と 弓矢を 交換しないか」ともちかけ、兄は渋々交換しました。山幸彦のホヨリは、海に魚を釣りに行ったが、釣れるどころか、兄から借りた釣り針をなくしてしまった。弟ホヨリは、兄ホデリに、針を無くしたことを伝える。兄ホデリは、針を返せという、あの針がいいという。

弟ホヨリは、海辺で泣いていると、海神ワタツミが現れ、「ワタツミの宮殿に行け ワタツミの娘が あなたを救ってくれるだろう」という。宮殿では、ワタツミに豪勢なもてなしをされ、娘のトヨタマビメと結婚する。3年経って、兄ホデリの針を探しに来たことを思い出し相談した。

ワタツミは、魚たちを呼び集め、赤鯛の喉に兄ホデリの針を見つけた。ワタツミは山幸彦のホヨリに、針を返すときの呪文を教えた。ホヨリはワニに乗って帰った。兄弟二人は農耕をした。兄ホデリの田は育たず貧しくなり、弟ホヨリを攻め込んだが、負けて降参した。

トヨタマビメがホヨリを訪ねてきた。天つ神の子が授かったので、陸地で産みます。決して覗かないで。ホヨリが産屋を覗くと、出産でのたうつ姿がワニでした。トヨタマビメは覗かれたことに失念し、宮殿に帰り、母の代理として妹のタマヨリビメを遣わした。天孫降臨のニニギ、海神の力を得たホヨリ、そしてその子ウガヤフキアエズを、日向（ひむか）三代と呼ばれる。その子孫が初代、神武天皇となる。

三浦祐之

◎先生：古代では、獲物も、道具も、「サチ」という。獲物も道具も獲る人も三位一体だった。海幸彦が、「針を返せ」というのは当然のことだ。世間は山幸彦の味方ばかりするが・・・。

◎先生：ワタツミは海の神のこと。三男：ホオリ：山幸彦は、海の力を得る。

◎地上に戻った三男：ホオリ：山幸彦は、ワタツミの教えられた通りにして、兄ホドリを懲らしめる。

◎ホオリはワタツミに教えられたとおりに針を返した。そのため、それ以後は、ホドリはだんだん貧しくなり、荒々しい心が芽生えて攻め寄せてきた。そこでホオリは、攻めようとする時には、塩盈珠（しおみつたま）を出して溺れさせ、助けを求めた時には、塩乾珠（しおふるたま）を出して救った。このように悩まし苦しめると、兄は頭をこすりつけて、「わたしは 今からのちは 昼も夜も あなたの護り人となって お仕えする」といった。

◎一夜だけで子を孕んだサクヤコノハナビメが、ニニギの前に現れるのと同様、トヨタナビメが、「御子を孕んだ」とホオリの前に現れる。サクヤコノハナビメ（山の神の娘）が、火の中で子供を産む。トヨタナビメ（海の神の娘）が、ワニの姿になって子供を産む。天つ神は混血を繰り返すことで、地上に住む力を増幅していく。

◎ここに、トヨタナビメがみずから参りでていうには、「わたくしは すでに身ごもっており 今まさに子が生まれる時になりました ここに考えますに 天つ神の御子は 海原で産むことはできません それで参り出てきました」そこですぐさま、その海辺の渚に鶺鴒の羽根を萱にして生殿を作った。ところがその生殿がまだ葺き終わらないうちに、トヨタナビメの腹があわただしくなって、耐えられなくなった。それで、生殿にお入りになった。そしてもうすぐ生まれるという時に、その夫に申していうことには、「すべて よその国の人の子を産むに際しては 本国の姿で子を産みます それで わたくしも今から 本の身になって子を産みます お願いですから どうぞわたくしを見ないでください」

◎してはいけない、と言われると、してしまう・・・。イザナキもイザナミを、見てしまった。

◎トヨタナビメは、ホオリが、おのれの姿を覗いたことを知り、心恥ずかしいと思い、そのまま御子を置くと、「わたくしは いつまでも海の道を通って往来しようと思っていました。しかしあなたが、私の姿を覗き見してしまわれたこと、これは耐えられないほど恥ずかしいことです」そのまま海坂を塞いで帰ってしまった。とはいえ、下記の歌をやり取りして、お互い愛しがっている。

◎蛆のたかった身体を見られたイザナミも、娘を返されたオホヤマツミも、ワニの姿を見られたトヨタナビメも、みな、辱められたと言って怒り、相手との関係を遮断する。

◎トヨタナビメ： 赤玉は 緒さへ光れど 白玉の 君がよそひし 貴とくありけり
赤く輝く石の玉は、紐さえ輝いてすてきだが、まっ白な真珠にも似たあなた様の姿こそとおとくいます。

◎ホオリ： 沖つ鳥 鴨着く島に わがい寝し 妹はわすれじ 世のことごとに
沖から飛び来る鴨の宿る島で、私が誘って共寝した愛しい妹は忘れない。 この世の果てるまでも。

◎天孫降臨に始まったニニギから、ホオリに、その子、ウガヤフキアエズで、日向三代（ひむかさんだい）と呼ばれるようになりました。成長したウガヤフキアエズは自身の育ての母である叔母、タマヨリビメを妻として、イツセ・イナヒ・ミケヌ・カワミケヌの四柱の御子をもうけました。次の物語は長兄と末弟に引き継がれ、末弟のカワミケヌは後に、神倭伊波礼琵琶古命（カムヤマトイハレビコ）となり、初代：神武天皇となります。

◎天孫降臨に始まったニニギから、ホヲリに、その子、ウガヤフキアエズで、日向三代（ひむかさんだい）と呼ばれるようになりました。成長したウガヤフキアエズは自身の育ての母である叔母、タマヨリビメを妻として、イツセ・イナヒ・ミケヌ・カワミケヌの四柱の御子をもうけました。次の物語は長兄と末弟に引き継がれ、末弟のカワミケヌは後に、神倭伊波礼琵古命（カムヤマトイハレビコ）となり、初代：神武天皇となります。

◎神武の東征：末弟イワレビコ（カワミケヌのこと）は長兄イツセに、「よりよくこの葦原中つ国を 治めるために 東方に向かわないか」と提案し、兄弟は東の方に向かうことになりました。

◎日向の高千穂を出発し、豊国（ふこく）の宇佐（大分県の北の海岸）へ。

◎筑紫の岡田宮（福岡県北九州市）そこで1年過ごす。

◎阿岐の国：多祁理宮（たけりのみや：広島県府中市）そこで7年過ごす。

◎吉備の国：高島宮（たかしまぐう：岡山県玉野市）そこで8年過ごす。日本書記では3年。

◎浪花の渡（大阪湾）を過ぎ、白肩津（しらかたのつ：東大阪付近）に停泊していると、富美（奈良市）の豪族：長髓彦（ナガスネヒコ）が軍勢を率いて攻めてきた。兄イツセが矢を受け負傷。イツセ、「我々は 日の神の子なのに 日に向かって（東を向いて）戦ったのがよくなかった 今度は 日を背に 西を向いて戦うことにしよう」と述べた。一行は敵の東方に回り込むため、南側に進路を取り迂回することに決めた。

◎紀伊の男之水門（みなと）に到着したが、兄イツセが傷の悪化で死んでしまった。

◎一行は紀伊半島を迂回し、熊野に到着。突然、大きな熊が現れ、姿を消したかと思うと、悪しき神の伊吹に当たって、一行は倒れ込んだ。その時熊野の高倉下（タカクラジ）が太刀をもって現れ、その太刀を使って、悪しき神の息吹を薙ぎ払い、一行を救出します。イワレビコがその太刀を受け取ると、荒ぶる神は逃げ去っていきました。

◎イワレビコの問いに、タカクラジがいうには：寝ていたところ、高天が原のアマテラスとタカギノカミ（タカミムスヒのこと）があらわれ、武の神タケミカツチを呼び出し、支援を呼びかけた。タケミカツチはアマテラス等に、「国を 平定した時の 太刀があるので その太刀を 授けましょう」と答え、タカクラジに、「倉の屋根に 太刀を 落とすから 天つ神の御子に 届けよ」と命じました。翌朝、太刀があったので、はせ参じたという。

◎その太刀は、フツノミタマと言い、石上神宮に鎮座している。

◎高木神（たかぎのかみ）の声が響き渡り、「八咫鳥（やたがらす）を遣わすので その導きに 従いなさい」

◎八咫鳥の先導で吉野川の河上に到着します。ニエモツノコ・イヒカ・イワオシワクノコ、この三つのものとは、熊野の土豪達を帰順させ、宇陀に到着した。

◎3か月前の、2月15日、雪の高見山に登った。高見山は奈良と三重の県境にある。その時雪の中に半分埋もれて、今回の東征話に関する看板があった。

◎国見岩：神代の昔、神武天皇が熊野・伊勢を経て高見山を踏破。この峻岩を天皇みずからよじ登り四方を展望、兄猾の根拠地の宇陀を眼下に見て、また遠く男坂、女坂、墨坂方面の長髓彦等の敵情を視察された第一回目の軍事評定をしたところであると伝えられている。

◎天皇は宇陀の高倉山に登り、あたりを見回しました。すると、国見丘に、ヤソタケルが陣取り、女坂に女軍を、男坂に男軍を置き、墨坂で炭火をおこし待ち構えていました。また、エシキの軍勢が、イハレノムラに満ちあふれていました。敵軍の居る場所は交通の要所で、そこを塞がれたために皇軍は身動きが取れなくなりました。

◎高倉山の候補：宇陀に入る前に国見をした。

1. 大宇陀の高倉山
2. 宇陀松山城跡の小城山
3. 高見山

三浦祐之

- ◎高天が原から降りたニニギから四代目、地上で誕生した天つ神の子、カムヤマトイハレビコは、「いかなる地（くに）に住まいすれば 平らかに天の下のまつりごとを治めることができますか ここから出でて東にいきませんか」兄イツセに語りかけた。
- ◎次兄は常世の国へ、次々兄は母の国である海原に、それぞれ行ってしまった。
- ◎日向を発った兄弟は、各地に逗留しながら東に向かう。苦難の旅の末、倭（やまと）に入り、畝傍の白檮原（かしはら）の宮で天下を支配することになるのです。後世の呼び名を神武天皇、この旅は“神武東征”と呼ばれる。
- ◎“倭”とは、桜井市・橿原市・明日香村など、大和三山を中心とした部分を言う。古事記には、「大和」「日本」という表記は無い。
- ◎「神武」「仁徳」という漢字で二字の表現は、漢風で、8C 後半に名付けられた。古事記・日本書記・風土記など奈良時代の歴史書には、漢字で二字の表現は存在しない。
- ◎「天皇」という呼称も、7C 半ば以前には存在しなかったというのが近年の説です。6C 以前の天皇は、大王とか大君という呼び名もあります。
- ◎仏教伝来：540～550 年。推古天皇即位：592 年 小野妹子：遣隋使：607 年。大化の改新：645 年。古事記完成：712 年。日本書記完成：720 年

◎イハレビコはなぜ東に向かったのか：先生の面白い説：東：ヒムカシ：日に向かうところ。我々人類は、太陽が昇ってくる方向に進むと繁栄がもたらせる、という DNA が埋め込まれているのかも。人類はアフリカから東に向かった。一万数千年前、東アジアにいたモンゴロイドが、凍結したベーリング海峡を渡って、アメリカ大陸に渡った。

◎白檮原（かしはら）の地で即位し、トイハレビコは初代神武天皇になった、ということは現代ではだれもが考えない。古事記では、「畝傍の白檮原の宮にいまして 天の下をしらしめしき」と記されているだけ。

◎下記は、強敵を倒して喜び騒いでいるところでしょうか。その下は闘いの歌、久米部は近衛兵の同伴氏。

うだの たかきに しぎなわ張る わがまつや しぎはさらず いすくは くぢらさやる こなみが なこはさば たちそばの みのなけくを こきしひいね うはなりが さこはさば いちさかき みのおほけくを こきだひいね ええ しやごしや ああ しやごしや	宇陀の 高い山城に 嶋を獲る 罟網をはったよ ところがどうだ わしらが待つ 嶋はかからず 磯も麗しい 大物鯨が 引かかかったぜ しわくちゃ妻が おかずを欲しいと 乞うなら タチソバ実のごと 実の無いスジ肉を こんちくしょうめ 後にもらった若妻が おかずを欲しいと 乞うなら イチサカキの実のごと 実の多い美味しい肉を こんちくしょうめ ええい へなちよくどもよ ああよ 腰抜けどもよ
---	--

みつみつし くめの子らが あはふには かみらひとと そねがもと そねめつなぎて うちてしやまむ	力にあふれる 久米の子たちが アワ畑に生えた ニラがひとと その根元から その根も芽もつないで根こそぎに みな撃ってこそ止めようぞ
--	--

みつみつし くめの子らが かきもとに うえしはじかみ くちひひく われは忘れじ うちてしやまむ	力にあふれる 久米の子たちが 垣根のわきに 植えたハジカミ 口のヒリヒリ 忘れはしないぞ みな撃ってこそ止めようぞ
--	--

かむかぜの いせの海 おひしに はひもとほろふ しただみの いはひもとほり うちてしやまむ	神の風吹く 伊勢の海の 大きな岩に へばりつき這いまわる 巻貝のごと 兜をつけて這いまわり みな撃ってこそ止めようぞ
--	---

- ◎車の運転をしながら、ICレコーダーのボタンを押している。このボタン、買った当初から往生している。運転しながらボタンを押すが、動かない。on・offの動作に両手を使わないとできないとは情けない。もっとも、両手を使わないとできないぐらいに、ボタンが固いほうが誤作動がすくないかな。ポケットの中で勝手に作動をはじめ、電池が無くなってしまおうということも防げるかと思っておしている。
- ◎そのICレコーダーの音声を起こしている。朝の6時前、滋賀県のマキノ高原に向かって走っている。5:40に家を出た、もうすでに明るいがちょっと早いぶん、車が少ない。前は6:30ぐらいに出たがすでに朝の渋滞が始まってなかなかスムーズに進まなかったが、今日はスムーズに進む。たった30分ぐらいの早起きだけど、この30分が生死を分けるとは表現が大げさすぎるが、7時には湖西道路に乗っていた。一回だけ、前もその前も青信号なのに進まないことがあったが、これが何度も続くと、時間がかかる渋滞じかんだね。
- ◎“往生”漢字はこれであっているのか、く極楽浄土に往って生まれ変わる。死ぬこと。あきらめおとなしくする。困り果てる。>
- ◎マキノ高原温泉キラリに8:30到着。三宅さんの車がもう止まっている、カーテンを閉めて寝ているのを起こし、一台をここに残し、もう一台で3キロ離れた大谷山登山口まで向かった。このあたりは獣除けのため、背の高いフェンスで村々を囲み、ところどころの扉を開閉して進んでいく。大谷山の登山口にもこの扉がある。
- ◎1時間ほど登ってきた。予報では、「快晴 6月並みの暑さ」と言っていたが、シャツ2枚でちょうどいい気候、空には雲もなくやや霞んだ青空が樹々の間からのぞいている。樹々と言えば今は盛んに葉っぱが出ている。メタセコイアの並木も葉が茂り緑のトンネルになっていた。一か月前は、メタセコイアに、しょぼい若葉がで始め、それなりに美しかったが、緑のトンネルはちと興ざめである。山の樹々も、針葉樹の濃いみどり、広葉樹の柔らかい緑、ミドリが緑みどりしてきた。
- ◎大谷山直下に、いい雰囲気のところがある。てっぺん付近なのに谷から幾筋も水が流れ、本流は幅2.3メートルの流れになっている。ポコリへこんだ広い場所、大きな木がぼつりぼつり、獣君の集会場所かな、水飲み場かな、昔は山仕事のおっさん連が水を飲んで休憩していたかな、涼しくていい感じだ。
- ◎12:00乗越到着。「ここで飯にしましょう」白っぽい石がゴロゴロの中に座って弁当を広げた。
- ◎石灰岩：調べると難しい話がゴロゴロ出てきて、「こらあ わからん」とすぐに閉じた。炭酸カルシウムが主成分で純度が高いと大理石。海の生物が積もったものと、洞窟などで炭酸カルシウムが沈殿したものがあるらしい。鈴鹿の山はこれが成分らしい。弁当を広げた場所の石も、セメント色をしている。
- ◎弁当は手造り、玄米ごはんに梅干しと胡麻、野菜炒めにベーコンと卵を混ぜている、美味しいじゃないですかと、われながら悦に入る。「もう暖かいから 前の晩に作ったら 腐るよ」そう言われながらも、朝が早いので前の晩に、弁当とサンドイッチを作り、クーラーに入れて傷むのを防いでいる。目の前には霞んで琵琶湖が広がる、もっと向こうに山肌を大きく削り取られた伊吹山、鈴鹿の山々は雲やら地平線やらという雰囲気。立って振り返れば、若狭の街並みと日本海、そしてロシアが見える。
- ◎大谷山のとっぺん、このあたりの尾根はおおむね草が生えているゆったりとした大地、ほんのまばらにひよろりの立木がそれでも若草色の葉をつけている。よほど風雪がきついのだろうと想像するが、木が大きくなれない場所だ。夏に来た時は道が隠れてわからないぐらいに草が生い茂っていたが、雪の季節はここは来たことがない。琵琶湖がすぐそばに見える、マキノ高原はこんなに琵琶湖に近いのかと再発見、メタセコイアの並木は、「なんだ あれか・・・」と上からの景色はつまらない。
- ◎大谷山のとっぺんで休んでいるが、スマホの地図に、もう少し先にも大谷山と書いてある。しかも向こうの方がどう見てもこちらより背が高そう、不思議だなと思いながら進みだした。はあはあぜえぜえ言いながらそのポコリンを登っている、「空が見えてきた もうすぐだ」「先の方に 標識の棒が 立っている もう一つの 大谷山かな」「あれれ これは 寒風峠じゃないか」なんのことはない、我々がそこから降りる計画をしている峠にやって来た。前回の赤坂山でも通った見覚えのある風景の寒風峠だった。どうもスマホの地図が、間違っていて書いているようだ。
- ◎下りはとつとこやつとこ歩いて、4時前にマキノ高原駐車場まで下りてきた。二人で車に乗り込んで、大谷山登山口まで来て、靴を脱ぎコーヒーを飲む準備。椅子と机、水とポンペ、そんなこんなが出てきた。
- ◎「風呂に入るか もう一泊するか 朝日が見たい、撮りたい・・・」そんな三宅さんと別れ帰途についた。家には8時ころに着いた。
- ◎とっぺんでオレと同じアクションカメラを回す女性に会った。保存方法、編集方法などを聞いた。彼女は、アップルの編集ソフトを使いYouTubeに載せているとのことだった。オレは動画を撮りだして1年足らずだが、データの重さに閉口して、「どうしたものか・・・」と思索していた。先日もデジタル関係に詳しい友人に聞くと、「今は テラの時代 500メガや 1000メガ ぐらいなんのその・・・」と言っている。「見せるための UPも 自身のホームページで じっくり 見てもらう のも よし」「YouTubeに UPして 多くの方に 見せる のも よし」ということだった。

- ◎自転車をいつものところに止め、河川敷に入るために、土手外側の坂をゆっくり上がり、てっぺんから、土手内側の坂をゆっくり下っている。そういえばここは、土手の外と中が坂で繋がっている数少ないところだ。5月も下旬、梅雨が間近という季節、昼の2時は涼しい風の中にフワリ暑さを感じる。ぼんやりした青空、太陽もぼう～っと輝いている。毎日この時間に安威川に2時間近く来ていると、まず顔と手の甲が陽に焼けて黒くなってきた。その次に腕が、もう少し季節が進むと半ズボンになり足が黒くなっていく。食事の時に、褐色の机に手を伸ばすと、「えええ オレの手と 机の色が おなじじゃ ねえか きたないねえ・・まして顔が この色じゃ・・」なんて苦笑している。
- ◎安威川の水が透き通っている、何日か大雨が降っていない、水の量も少ない、浅いところは10センチぐらい？深い所でも50センチぐらい？水底の砂が石ころが見えている。50センチ以上もありそうなまるまる太った鯉が流れに向かって何匹か見えることがある。最近あまりバシャバシャ暴れていないが、交尾の季節には、5匹10匹がもつれあい、バシャバシャおお暴れの姿をよく見かけた。TVの映像でサケの交尾の姿を何度か見ているので、「鯉も 同じスタイルかな」と思っている、あれは生存競争の闘争だね。
- ◎土手を降りてくる途中から、水の中にいるシラサギがよく目立つ。シラサギという種類は無いそうだが、子供時分から、白いサギを“シラサギ”と呼んでいる、まあまあいいじゃないの、今更これでとおしますよ。シラサギ君が立っている所以水深は10センチぐらいかな、長い足を抜き足差し足忍び足、長細い首で水の中をにらみながら、ひょっこらひょっこら、「やつめ 狩が下手なんだ」サギが次から次に魚を啜っている姿なぞお目にかかったことがない。そのてん、鶺鴒は狩が上手と聞く、安威川にも今は鶺鴒がたくさんいる、いつからいるようになったのか知らないが、昔はいなかった。反対に上空を舞うトビがいなくなった。
- ◎衣川さんが、医療現場のデジタル化で、「パニくっている 雑用が増えた」とぼやいていた。それに答えてかんちゃんが、「パソコンを 習いに 知っている」という。オレは一年前ぐらいから動画に興味をもって、「動画の編集ソフトを なんとかものにしたい」「ジジイになって わからん わからん どうして どうして」なんてぼやきながらなんとか半年ぐらいで使えるようになった。絵を描く、物を創るで生涯歩いてきたオレにとって、「筆も パソコンも 道具じゃ」と豪語している、なんてえらそうにいうが、50歳になって覚えたパソコンは苦勞の連続だった。いつも言うように、パソコンというこの道具、便利そのものである。いかに便利かという話は、いつも書いているが、またそのうちにね。
- ◎衣川さんは7歳ぐらい下、かんちゃんは5歳ぐらい上だ。かんちゃんが、「80歳になると 老を感じる 肉体の減びを感じる 老だ 肉体が減びだ ひしひし感じている 若い人には 実感できない 感覚だ」と思う、とおっしゃる。何年か前に近所のおばちゃんが、「年とったら 次から次に おかしいところが 出てくる あっちゃんの医者 こっちゃんの医者 情けないわ・・」てなことを言われていたが、もうその方の姿も見なくなった。
- ◎親しい友のお二人が、「いやだ いやだ もういやだ・・」とおっしゃるとそばにいる輩にいうと、「空を向いて 歩こうよ・・だね」とそばにいる輩がおっしゃった。
- ◎「ところで 岡村君 お前の心境は どうやねん」なんて聞かれると、「そうやねえ いやだはないね さいこう～ とかもないけどね・・」なんて下世話な口調になるが、自身の人生を語れない性格なのか、いつもそんな話はしないね、自身のことは・・。
- ◎毎日アトリエに籠って絵を眺めている、眺めにらんで見つめたところでそう上手い一手が浮かんでくるわけではない。絵を描き込んでいくとろくなことが起こらない、ますますどつぼに嵌まり、絵が汚くなる、取り返しがつかなく元に戻れない。白いキャンバスに、絵の具をたっぷり、ひと刷毛、ふたブラシ、これを10も20もやると、どつぼになる。ただ、壺に嵌まったときは嬉しいねえ、最高だ、一日気分がいい。これを期待して、毎日過ごしているようなものだ。
- ◎“どつぼにはまる”これは肥えダメに落ちることらしい、これはよくない。オレが幼少の頃には、大阪の郊外、近所の田んぼには、“肥えダメ”がたくさんあった。蓋をされた中では、人糞が醗酵してぶつぶつ泡を吹いている状態を何度も見ていた。人糞も出来立ては臭くて汚いが、半年も経つと、農耕用の濃厚肥料になったそうだが、「え 人糞を 食料の 田畑に 撒くの」とびっくりした外国人もいたとか。
“壺に嵌まる”この言葉は、「急所をつく」「見込み通りになる」ドツボに反して、いい言葉のようだ。

三浦祐之

- ◎ヤマトタケルは、12代天皇オホタラシヒコオシロワケ（景行）の御子、ヲウス。大君の子に生まれながら、大君に疎まれ、さすらい、ついに白い鳥となって天にかけて行った。
- ◎前回の話の中で、大君とヲウスの会話。大君がヲウスに、「兄に ねんごろに教え諭してやりなさい」結果が見えないのでまた、「もしまだ兄を諭していないのか」ヲウスは、「とくに ねんごろに しました」と答えた。原文では、「泥疑教覚ねぎおしへよ（ねんごろに諭してやりなさい）」
- ◎この部分、父と子の断絶が、“ねぐ”という言葉にある。父は、「ねんごろに ねぎらう」という意味で言ったが、ヲウスはねんごろに始末した。やくざの、「かわいがる」とか、運動部の、「しごき」のように。
- ◎ヤマトタケルは、大君の御子として、申し分ない血筋に生まれながらも、自身の持つ、生まれながらの暴力性が、父に疎まれるが、いっぽう英雄になっていく。

- ◎クマソタケルの殺害時に、だれだと問われ、「わたしは 纏向の日代（ひしろ）の宮にいまして この大八島の国をすべて治めておわす オホタラシヒコオシロワケの大君の御子」と答える。
- ◎オロチ退治の場面で、スサノオがアシナツチに問われて、「われは アマテラスの 母をひとしくする弟である」と答える。
- ◎二人とも、当然のように答えるが、スサノオは追放された身。ヲウスは、本人は気づいていないが、疎まれ追われた身、こういう二重性が口承の際、聞き手のイメージが膨らむ。
- ◎イズモタケルの殺し方は、これはずるいのでは。猛々しい頭がいると聞き、そいつを殺そうとして出雲で出かけた。相手と友の契りを結んで油断させ、偽物の太刀を相手に持たせて切り殺す、だまし討ちの手口は、知恵を通り越して、ずるい、卑怯なのでは。スサノオと同様、鬨りを持つ人物として造形か・・・。
- ◎3.4世紀、ヤマトと纏向で、初期ヤマト政権が成立したのでは・・・。出雲の話は日本書紀には無い。

◎すなはち出雲国に入りまして、その出雲健を殺さんと欲ひて、到りますすなはち友を結びたまひき。かれ、ひそかにイチヒ（櫟の木）以ちていつわりの刀を作り、御佩（はい）として、ともに肥河（斐伊川）でカワアミしたまひき。ここにヤマトタケル、河より先ず上がりまして、イズモタケルが解き置ける横刀を取りはきて、「太刀かへせむ」とのたまわりたまひき。かれ、のちにイズモタケル河より上がりて、ヤマトタケルのいつわりの刀を佩きき。

◎ヤマトタケルは出雲国に入って、その頭であるイズモタケルを殺そうと考えました。ヤマトタケルはすぐイズモタケルと友達になりました。ヤマトタケルはひそかに、櫟の木で偽の太刀を作り、それを身に着けて、イズモタケルと肥河（斐伊川）で水浴びをした。ヤマトタケルは先に河からあがり、イズモタケルに太刀を取り替えようと言った。イズモタケルは河からあがり、偽の太刀を付けました。「太刀合わせをしよう」と言ったというが、太刀合わせとは、軽〜くキャッチボールなのか、練習試合なのか、真剣勝負なのか・・・。ヤマトタケルは相手の刀が抜けないことを承知で、ばっさりやって切り殺した。

倭の国のまほろば たたなづく 青垣 山隠れる 倭し麗し
ヤマトの国は素晴らしい所 長く続く垣根のような山に囲まれ ヤマトは美しい

命のまたけむ人は たたみこも 平群の山の 熊白禰（くまかし：榎）が葉を うずにのせ その子
命を全うできる人は 幾重にも重なった平群の大きな榎の葉を 魔よけのかんざしとして さすがいい

ヤマトタケルが死んですぐに、白鳥になって飛び立った、伊勢の方から奈良に向かって、難波に向かって。ここで白鳥が出てくるとは驚きだけれど、命知らず、鬼のような英雄が命つき、白鳥に姿を変えて飛び去って行く、古事記のロマンだねえ。

- ◎なりゆきでちょっと山へ、ということで鈴鹿山系の南の端っこあたりに来ている。山の地図は持っているが、このあたりの山はまったく知らない、土地勘がない。車の助手席で、「あぶらひ という山が あるけどこれ 行ってみますか」「地図では もうちょっと 行ったところで 右に曲がって ゴルフ場を過ぎて・・・」油日神社を発見。油日神社：帰ってサイトを見ると、なかなか立派な神社だった。
- ◎「多分 こっちじゃ ないかな」と進んでいると、「油日岳登山口 この先」の看板が。狭い道を長らく走ると、白い紙の案内板。初めてきた山なので、この案内板に従って登ることにした。オレの地図ではたったの35分でてっぺんに着くとなっている。白い紙の案内板のおかげで、いたく危険な、それでも楽しい山行になった、帰って何度も地図を確かめ、「あああ このあたりで 道を間違えたのか・・・」と苦笑している。
- ◎2:30弁当を喰って水を飲みやっとな息、「あ～あ えらいめに あった」と大笑い。気が抜けない、両手が離せない、おととつと、こらしよ、枝を掴み、根っこを掴み、ズルズルの砂、安定しない岩、「空が見えてるので すぐのはずやが・・・」「おおお かみさま・・・」「これは獣道 きやつらの運動神経には ついていけない」「白い紙の案内板では 林道の先と合流するはずだけど・・・そんな道は なかったね」「左に曲がらんとあかんのやが 見過ごしたのか・・・」「ええい 尾根道 直登 行ってまえ」「戻ったほうが いいんじゃないの」「いやあ 行ってまえ」こんなセリフは10年前のまだ体力のあったころのものだね。
- ◎「尾根だ 尾根だ」とよじ登り、30分のコースタイムが、2時間もよじ登って来た。「おお 道がある これは人の道 小屋がある これで大丈夫」囲炉裏のある小屋の入り口で飯を喰った。喰い終わっても、「ここがどこ」「てっぺんはどこ」と迷いがあった。
- ◎飯を終わってすぐ上のてっぺんにやって来た。油日岳693Mとなっている。「そんな さっきの 小屋の前を 通って 下りましょう」と急な道を下りだしたが、「これは道じゃない また 崖だ」「さっき 登ってきたのと同じような崖だ もっと怖いかも こんなところは 降りられない 登山道は これじゃない もう一度 地図を見よう」内心またまた焦っている。
- ◎「あ わかった 三国山の方に進み 左に曲がる T字路があるはず それを下るんだ」そこに向かって進むが、まだかまだかと10分ほどで標識がある、「左 油井神社 1時間50分」と書いてある。「えええ そんなにかかるの・・・」「いやいや これは神社までの時間で 30分のはず 我々は車で相当奥まで入っているの・・・」それにしても登山道はありがたい、獣道はもうたくさんである。山の地図を持っていてよかった、たった往復たった1時間の山だけれど、またまた道を間違え、ケタイな方向に下れば ミニ遭難だ。
- ◎「どうぞこの道が 我々の車を止めた 道で ありますように」まだまだ不安だった、「30分ぐらいで 林道に出るはず」「タクシーはここまで入ると書かれたポイントはもうすぐのはず」下っていると、先ほどの白い紙の案内板がある。「なんだ ここだ ここに合流せんと いかんかった どこを間違えたか 左折するようなところは なかったがな・・・」
- ◎道のない尾根道、しかも結構な急斜面、シカの糞が落ちている、シカの足跡がある、尾根を登れば目的地に着くとわかってはいるが、「これを落ちたら やばいぞ」えいこらどっこいしょの登りだった。
- ◎我々が車を止めたところから、ちょっと上は広々と開け、廃屋もあり、昔は人が仕事で入っていたような様子が読み取れる。この登山口からてっぺんまで、1時間もかからずに往復できる軽～い山だ、軽く小さく低い山だけれど、こんな無名の山が意外と怖いんだ、といつも言ってる通りになった、と笑い。
- ◎白い紙の案内板はなんだったのか、地元の山岳会が、バリエーションルートを作り、「こっちもいいよ」と楽しんでおられるのかな、いずれにしても、登山道が破線で書かれていたから、その破線は不通かなと思ってしまった、初めてのものには破線が元来の道、通行可の登山道だとは知らなかった。しかし、白い紙の案内板の道を登ったおかげで、道を間違え尾根道を直登したおかげで、楽しめた、充実した、面白かった。
- ◎白い紙の案内板は25分で行けると書いてあるが、2時間もかかった、運動神経の弱い、恐がりのオレは、ひやひやものの、よじ登り登山でした。
- ◎「あぶらひ」漢字では書けない古代の匂いがする言葉、なんて感じてしまうのは、縄文やら古事記やらに興味があるからかな。油日神社は滋賀県湖東の田舎にあるが、けっこう立派な神社のようだ。油日岳も600Mの低い山だけれど、傾斜がきつい山だった。帰って山の解説を見ると、700Mぐらいの低い山の連なりだけど、アップダウンがあり、ガレ場があり、キレットがあり、「こらあ オレが近づく山じゃ ないよね」なんて思っている。昔は、「こんなところは ど～ってことないよ 怖くないよ」とスイスイ歩いていたが、2.3年前から、「あれれ おととつと」と運動間の鈍り危険を感じるようになってきた。ジジイ登山は無理をしてはいけませんぞ、単独はいけませんぞ、過信はいけませんぞ。